

主体性をめぐる闘い 戦後 沖縄文学 における コンヴェンションの「不在」と 代替としての自己準拠

武 山 梅 乗

0 . はじめに

仮に、沖縄在住、あるいは沖縄出身者の手になる文学作品、かつ単にその条件を満たすにとどまらず、沖縄 という共通の問題系にとらわれ、明らかにその他のテキスト群とは一線を画しているテキスト群を、そのテキスト群を生成せしめる諸条件を含めて 沖縄文学 とよぶことにする。その起源、萌芽を戦前に認めるにしても、沖縄文学 という特殊な文学空間（時にそれは「文学場」ないしは「文学界」とよばれる）は、戦後におけるアメリカによる占領、日本復帰という歴史的過程の中で現在見るような形で形をなしたとみるのが妥当であろう。本稿はこの 沖縄文学 の本質を、より正確に言えば、沖縄文学 という文学空間を可能にする諸規準（コンヴェンション）の本質を、戦後の沖縄における傑出した2人の文学者それぞれの文学者としての主体性の発見、及びその相克の過程の中に見いだすための試論である。その1人は、1967年に「カクテル・パーティー」で沖縄に初の芥川賞をもたらす、爾来今日に至るまで沖縄における創作活動を牽引し、沖縄における文学者の主体的なあり方を模索し続けてきた大城立裕。もう1人は、戦後の沖縄において批評というジャンルを確立したと評される『琉大文学』の中核的メンバーであり、1970年前後の反復帰論を経て現在に至るまで、一貫して 沖縄 における主体性を問い続けてきた詩人、批評家の新川明。1950年代以降、2人が示す文学者としての主体性はしばしば激しくぶつかり合いながら、ある局面では奇妙な融和をみせ

る。

本稿では最初に、新川明の「反復帰論」が「政治運動」ではなく、一個人のアイデンティティをめぐる思想的営為であったことを確認した上で、一連の「反復帰論」の中の非連続性を問題とする。次にその非連続性を大城立裕との論争と関連づけて、沖縄における「文学者の主体性」の問題を検討する。そして最後に「沖縄文学」における傑出した個性がともにその下に置かれていたであろうコンヴェンションの「不在」という問題について、主に大城立裕の視点からふれることで結びとしたい。

1. 反復帰論

(1) 反復帰論と『反逆と統合』の連続性

1970年前後に、沖縄において展開された「反復帰論」の中心論者である新川明は、2000年5月、『沖縄・統合と反逆（以下『統合と反逆』）』と題する一冊を上梓した。『統合と反逆』は、新川自身が「あとがき」で記すように、昨今沖縄に再び頭を持ち上げてきた「同化主義」に対する批判を終始一貫その基調としている〔新川、2000:261〕。それでは「同化主義」とは何か？ここで問題とされる同化主義とは、近代国民国家が国民統合を遂行する際に、「統治（統合）される側の積極的な受容による『統合』への参画という形」をとるものである。さらに新川の言葉を借りるならば、日本に対する忠誠意識、日本国民意識によって自らに精神的・肉体的な自己鍛錬を課し続ける、沖縄側の強烈な日本同化の精神志向、沖縄人がみずからすすんで「国家」の方へと身をのめり込ませてゆく内発的な思想の営為が同化主義であるといえる〔新川、1971a=1971:281、1971c=1971:304〕。

実際のところ、新川が同化を強制する国民国家（日本）側を直接批判の俎上にのせることはほとんどない。「守礼門」新札（2000円札）の発行をどう読むかという問題（第1章）で嘲笑されているのは、日本国政府の新札発行の「意図」をそれとして読めない地元ジャーナリズムの認識の甘さである。米軍基地を容認し、それを基礎においた経済至上主義である（と新川がみなす）「沖縄イニシアティブ」論者たちの言説を日本国政府の沖縄統合政策を補完する「新

同化主義」として糾弾とする箇所（第4章）においても、高良倉吉らその中心論者は当然のこととして、新同化主義である「沖縄イニシアティブ」論に「まともな批判をほとんどしていない」新崎盛暉にまで批判の矛先が向けられている。

日本 という国民国家が存在し、それが 沖縄 の 日本 への統合を強制してくることを前提とした上で、沖縄側の同化主義思想を撃ちすえるという『統合と反逆』所収各論はその30年程前に展開された一連の反復帰論とまったく同じロジックが貫かれている。1970～71年にかけて発表された一連の評論から構成されている反復帰論を新川の企図から正確に理解するために、また、反復帰論に対する批判の妥当性を問うために、反復帰論がその中で展開された政治的状况を必要最低限にまとめておこなうならばおよそ以下ようになる。

沖縄における「祖国復帰運動」が「日の丸復帰」から「反戦復帰」へと移行する中、1968年に行政主席の公選が実現し、米軍基地の「即時・無条件・全面返還」を主張する革新共闘の屋良朝苗が当選し、立法員議員選挙、那覇市長選挙でも革新側が圧勝した。しかし、「本土の自民党とも友好関係を保った」屋良は、前年の嘉手納基地のB52戦闘爆撃機墜落時件を受けて計画された1969年2月のゼネスト（いわゆる「二・四ゼネスト」）を回避するよう県民共闘議会に要請し、革新政権保守の立場からこれに従う組織が出てきたため、結局ゼネストは崩壊してしまう。1969年11月のニクソン・佐藤会談で、沖縄の施政権を「核抜き、本土並み」で1972年に日本政府に返還する基本方針が発表されたが、これは多くの沖縄住民の「反戦復帰」という要求とはかけ離れたものであった。1970年に戦後初の国政選挙が実現し、5人の衆議院議員と2人の参議院議員が選出され、ここでも革新が多数を占めたが、新川明の解釈によれば、72年の返還を待たずに国会へ議員を送るということは、「国会に沖縄代表を同席させることで沖縄の同意のもとで『返還』が実現した形にする日本政府の企図に自らはまること」であった。

そのような政治的状况を背景として、新川明の反復帰論は展開された。『反国家の兇区』（1971年）として総括される新川明の反復帰論を構成する各論は、沖縄内の 復帰 思想への批判、 復帰 思想を是認する本土知識人への批判、

新川の 反復帰論 批判への反批判を通じて、反復帰 という理念の全貌を明らかにするというスタイルが徹底されている。例えば、「幻像としての日本^{ヤマト}」では、『新沖縄文学』第18号の特集「反復帰論」の論者たち（新川、大城立裕など）に対して「見当はずれのケチをつけ」、「単純な政治的解釈で矮小化する」「東京に住む半沖縄人（当間嗣光、霜多正次）」を批判し、「アメリカ占領支配下において確保した利権の保守をねらう琉球独立党の「沖縄独立論」の欺瞞を指摘し自身の反復帰論と区別した上で、以下のように結論する。

「日本復帰」という言葉によって衝迫された沖縄人（民衆）個々が、その運動の中で希求してきた日本・祖国・本土という言葉で表現される地域空間は、いわば目前の現実からの飛躍（現状改革）を志向する“夢”を仮託された抽象概念であり、日本・祖国・本土という言葉として実在する日本国それ自体は、その抽象概念によって人々の脳裏（意識空間）に描き出された「幻像」であるということだ。…ところが重要なことは、沖縄人の意識においてその希求する地域空間が、いかに抽象概念としてのヤマトウ＝日本であっても、それは現実には具体として実在しつづけるヤマトウ＝日本へ、みずからを容赦なく囲い込ませるものとして機能しつづけることでみずからの志向を裏切り、逆にみずから努力したその努力によって、みずからを含めて日本そしてアジアの人々を扼殺しつづける国家の存立を打ち固めていくという愚かしくも悲惨な自転をくりかえすのである [新川、1971b=1971:31]

内外に散在するあらゆる 復帰 思想を視界に入れ、これを徹底的に批判する新川の 反復帰論 が真の意味で対峙していたものは何か？それが最も明白にあらわれているのが、1970年、『新沖縄文学』第18号に「反復帰論」特集として掲載された評論「復帰 思想の葬送」である。「復帰 思想の葬送」では、明治期の「沖縄自由民権運動」の中心人物であった謝花昇の思想と運動が「天皇制イデオロギーの沖縄における形成を沖縄側から補完する機能をもつもの」として位置づけられている。しかし、新川のこの論考で批判の直接の対象となるのは、謝花昇でも沖縄自由民権運動でもなく、それを「無条件に美化し

その思想体質に対する積極的な解明作業を怠る歴史研究学徒」ですらなく、謝花らの思想的限界に関する新川の私見を「恣意的に歪曲しつつ勝手な論断を加えて非難中傷する」「特定政党（人民党）やそのお抱え評論家たち」なのである [新川、1970b=1971]

新川明が反復帰論の中で論破し、超克しようとしたのは「明治以降今日まで、沖縄の思想と運動を一貫して否定しつづけてきた日本志向の思想傾向」、復帰思想である [新川、1970b=1971:163]。沖縄人が日本^{ヤマト}に対して持ち続けてきたのめりこみの心情を新川は「復帰」とよぶが、復帰とは、「日本同化の志向に根ざして、日本と沖縄を等質なネーションとして溶解していくこと」に他ならない [新川、1970c=1971:66]。「沖縄を規定する支配の構造を根底のところから揺さぶる闘いとして闘われようとした」二・四ゼネストを干渉によって挫折せしめた屋良「革新」政府、返還を合意した体制の論理必然的な政治プログラムである国政参加を「人民のたたかひの成果」として宣伝する「前衛党・革新党を僭称する党派」に、新川は沖縄人のこの心情の典型をみるのであり（例えば「憲法幻想の破砕」[1970d]）、反復帰論における仇敵として「革新」諸政党が徹底的に糾弾されるのである。

この「国家としての日本へ没入帰一することをいささかも怪しむことを許さない、自明のこととする思想傾向」、すなわち「復帰」思想に何をもちて対峙するのか？それは「反復帰」というポジション、主体のあり方である。新川は「反復帰」について、以下のように述べている。

返還協定調印 = 72年返還という具体的な政治日程に突きつけられている国家の企図を「拒否」するたたかひの持続は、つきつめていえば、国家に対する反逆を、民衆個々の内なる思念として強固につくる以外にない。国家に対する反逆の最たるものは、すなわち国家に対する忠誠の拒否であり、そのような反逆の思念を沖縄の地でつくりあげる思想の営為は、私なりの表現でいえば「反復帰」という言葉に凝縮される。…いったい沖縄の復帰とは、分断されて異民族の支配下にある国家の一部が、もとの形に復する領土の再確定を意味するため、「反復帰」という言葉もただちにそのような政治的意味における復帰拒否

ということに限定されて受け取られがちである。だが「反復帰」という言葉に凝縮される反逆の思念は、それを沖縄人が国家としての日本に持ち続けたのめりこみの心情を鋭く突き刺し引き裂くものとしてとらえないかぎり、正当な意味は持ちえない [新川、1971d=1971:293-4]

(2) 主体の位相という問題

新川明の反復帰論は、反復帰論批判への反批判を重ねることで膨張していくが、その批判は概ね反復帰論の非現実性、政治的ヴィジョンのなさや指摘するものであった。そのことは、小熊英二が指摘するように、「語りえない願望 (例えば、『日本へののめりこみの心情を鋭く突き刺し引き裂く...』、あるいは『国家全体の否認』) を既存の政治言語 (反「復帰」) で表現することの限界を示している [小熊、1998:756]。そもそも、新川が、沖縄人が日本に対してもつと措定するのめりこみの感情を「復帰」というメタファで語ったことで、意図した争点が最初から奪われているのだ (このことは、新川が「闘うべき対象の本質の隠蔽であり歪曲である」と非難する、「革新」政党の「国政参加選挙」への積極参加と似ている)。

また、小熊英二は、反復帰論は元来「政治運動というよりも、アイデンティティをめぐる思想的営為」であったと指摘するが [前掲書:623] その指摘は、例えば新川の以下の記述によるものと思われる。

...まさしくそれ (反復帰論) は、個としてのみずからが、いかに 国家としての日本 にかかわるかについての問であり、全体論に対する個の問題である点で、その問は他者に対してよりも、みずからの内に向けた問いでもある [新川、1971c=1971:304]

...そのような左右両方からなされる差別告発論のみによっては、国家体制を打ち、これを破砕していくための改革のエネルギーを、民衆個々の内発的営為として誘発させることはできない。差別や抑圧や、そのような国家に対する被害者の立場を逆転して、国家に対する加害者へみずからを転化させる反逆の思

念は、あくまで個の位相でその生命を孕む。そこでは外に向けた差別告発の視点ではなく、みずからの内なる痛みとしての国家幻想をいささかなりとも存立せしめない内に向けた不断のたたかいがすべてに優先する（傍点引用者）[新川、1971d=1971:300]

上の2つの引用文をみる限りでは、「みずから」の主体は「一個の人間」として解釈するのが妥当なようにみえる。反復帰論は、小熊が正しく解釈しているように、沖縄における一個人のアイデンティティをめぐる思想的営為の問題であると読むことができる。しかし、同時に上の引用文の中で、新川はこの「みずから」の位相を、「沖縄人」の集合としての、全体としての沖縄に置いているようにも読める。実際に、反復帰論で批判の中心に据えられているのは、屋良朝苗、沖縄人民党といった「内なる」「沖縄人」であり、沖縄にとって「他者」あるいは「外」である「既成の政治党派」、「反沖縄人」「ヤマトゥー」などには軽蔑の眼差しが向けられるものの、少なくとも批判の中心には据えられていない。すなわち、本来は国民国家と対峙する個人のアイデンティティをめぐる思想的営為であるはずの反復帰論が、時として沖縄全体のアイデンティティをめぐる思想的営為としての相貌をみせるのである。ここでは主体の位相が、個人（民衆個々、究極的には新川明という個人）と全体（沖縄）とに二重に置かれているのである。

小熊英二は、新川の反復帰論が「既存の（政治的な）分類枠にあてはめることでしか理解されなかった」こと、そして結局新川自身もこの分類枠の中でしか語ることができなかったことを強調するために雑誌『世界』の座談会を引用する。

外間 …琉球独立論というのは、全体の国家のなかに自治領を作るといったような構想ですか。

新川 やはり考え方としてですが、日本全体が九州なら九州、そういったブロック別の自治体の連合みたいなものが望ましいんじゃないですか。

外間 となると、これは結局、もっと地方自治権を拡大・確立せよということ

に通じるわけですね。

新川 ただしかし、僕たちの究極的な理想としては、やはり国家全体の否認ということになってくと思うのです。たとえ資本主義国であろうと社会主義国であろうと、国家権力そのものの否定ということにまで、僕たちの志向を突き進めてゆかなければならない。...そうでないと、結局、体制の上からのナショナリズムを下から補完していくという役割をになうことにしかならない。...

安里 世界で権力のないところがどこにありますかね。それをお聞きしたいですよ。どこの国でも権力はあるはずなんですよ。

新川 だから僕たちが生きていくうえでの、ないしは行動するうえでの究極的な目標としての権力のない状態を設定しない限り、どうしようもないわけでしょう(傍点引用者)[小熊、1998:624より再引用]

また、反復帰論が「復帰」と「独立」という政治的な二項対立に絡め取られているのと同時に、それは「個」と「全体」という二項対立を提示し、「個」を志向しつつも、結果として「全体」に包摂されてしまうという倒錯をみせる。反復帰論として総括される新川明の諸評論は、本来、「個の位相」から国民国家への同一化を徹底して拒むというマニフェストであった。その意味で、反復帰論は『『有色人種』抄』や「日本がみえる」といった、新川明の詩人としての「思想的営為」の系譜に連なるといえる⁽¹⁾。しかし、復帰か独立かという、政治的に限定された争点のなかで、新川明は「全体」という位相から語らざるをえなくなる、「僕」ではなく「僕たち」と。なぜ、新川明は「僕」ではなく、「僕たち」と言わねばならなかったのか？その問に対する答えは、戦後沖繩におけるもう1人の卓越した個性である大城立裕が直面した問題とあわせて考察したいため、ここでは留保しておく。

2. 主体性をめぐる闘い

(1) 反復帰論との非連続性

『統合と反逆』は 日本 という国民国家を措定し、それにのめりこむ 沖繩

側の言説を目聡く掘り起こし、そのすべてに「否」を突きつけるというスタイルにおいて、1970年前後の反復帰論を概ね踏襲している。しかし、反復帰論の延長線上にないものもいくつか見受けられる。まず「復帰思想を「(新)同化主義」に、反復帰を「反逆」というより抽象度の高い言語に置き換えることによって、争点が政治的に限定されるのを回避したことである(もっとも「復帰/独立」という争点は既に消失してしまっているが)。しかし、そのこと以上に、『統合と反逆』の中に反復帰論との連続性を想定した場合に、異質なものとして浮上する記述が二つほどある。その一つは、戦後沖縄を代表する作家である大城立裕個人に対する過剰なまでの批判(あるいは反批判)であり(第3章)、もう一つが「自分史の中の『反復帰』論」(第2章)である。

まず前者について検討してみる。大城への批判は第3章「大城立裕論ノート」が中心となるが、『統合と反逆』全編にわたって執拗なまでの大城批判が展開されている。この批判が反復帰論との連続線上に位置づけられないのは、それが後に述べるような理由によって「同化主義」批判としての妥当さを欠いているようにみえるからである。

「大城立裕論ノート」は、大城の「自伝的自己総括」である『光源を求めて』への批判的対応という形をとっている。この大城批判には大きく分けて二つの争点が選択されていると思われる。すなわち、争点「『琉大文学』は沖縄戦後文学史上において問うに足る存在であるか否か」、争点「大城立裕が『光源を求めて』で提示する沖縄文化論にはその前提として国民国家 日本 の絶対性が措定されているか否か」である。

争点では、これまで大城によって度々なされてきた『琉大文学』そして新川への批判(「主体的な出発を」「挫折」を憂える』『休息のエネルギー』等々、そしてその総括としての『光源を求めて』)がいかに不当なものであるのかを詳細に指摘している。そして、その不当な「琉大文学」批判の裏に大城の「妄念」(「沖縄の戦後文学は大城ひとりで切り拓いてきたのであり、そこには何もの影響も示唆も受けてはいない[前掲書:182]」)を読み取り、大城の「文学者の主体性」に懐疑を投げかけることで、『光源を求めて』で総括されている大城の「沖縄文化論」が「同化主義」である、なぜならば大城の「沖縄文化論

には 日本 の絶対性が指定されているからという争点 の議論へと接いでゆく。その議論を補完するように、第4章では新川が「新同化主義」の代表論者であるとみなす高良倉吉と大城との関係がほのめかされている [前掲書:227-8]

一見して、この議論は「同化主義」の思想を、反あるいは非「同化主義」の思想をもって撃滅するという『統合と反逆』の主旨に合致するようにみえる。争点 は争点 の導入部でしかないように読める。しかし、新川のこの議論の重点はむしろ争点 にあり、争点 を補強するために争点 が持ち出されたのではないかという解釈の方が以下で述べる理由から妥当なように思える。

1970年前後の一連の反復帰論を注意深く眺めるならば、新川明が大城立裕に対してアンヴィバレントな感情を抱いているのがわかる。そこでは、『統合と反逆』において見受けられるような先鋭な大城批判(引用、)が見受けられる一方で、大城立裕という個性への愛着がほのめかされている(引用、)。

...大城のいう「文化」とは、あくまで沖縄のフォークロア=土着文化のパターンという範囲をこえず、「文化」問題としての「復帰問題」(または「反復帰」問題)も、いわばそのような土着のパターンを、どのようにすれば『『東京』に象徴される日本の腐敗文化』から守り抜くかということである。それを守ることによって逆に「日本文化に貢献することを考える」にすぎない [新川、1971c=1971:314]

...大城の論説が、それ自体としてはきわめて冷静で、理路整然としており、今日でも寸分の手直しをしないでもおかしくないのは何故か。...(それは)とりもおさず、大城立裕が、いつの時代、いかなる場合でも、みずから他者との抜きさしならぬ拮抗関係を自己内部で切り結ぶことをしない思考方法をもって、たえずみずからを安全な場所におき、現実の状況を規定する支配の思想と一定の距離を保ちながら、みずから傷つかない位置をとりつづけているからにほかならない [新川、1971c=1971:317]

...東京に...住み続けている一部の半沖縄人たちが、一定の政治的意図にそって、私はともかく、たとえば大城立裕という沖縄人としてユニークな特質を持つ個性のひとりである文学者にまでも、その発言（「文化想像力の回復」における発言）が自党派の政治主張にとって不都合な傾向にあるという、おそらくそれだけのことで断罪の叫びをあげるのを読まされると、思い上がりもはなはだしいその姿に、思わず吹き出してしまう衝動を抑えることができないのである。...それが政治家や法律家ではなく、同じ文学者であり、もとをたせば同じ沖縄人でありながら、沖縄にいる沖縄人作家と、東京に住む半沖縄人作家であることは、かくも異なる個体として分岐するものか、ということを痛感させずにはおかない鮮やかな対照である
[新川、1971b=1971:15]

新川明が上の引用で「半沖縄人」のレッテルを貼るのは、当間嗣光と霜多正次であるが、当間は「新沖縄文学」第18号の「反復帰論」特集に執筆している論者たち（大城立裕、新川明ら）に対して、「この執筆者...の詩的感性的文章は、本土で十余年前にはやりかけた文章、発想形態が下敷きになっている」と断じた上で、特に大城立裕に対しては、「相変わらず懐疑論でつねに煙幕をはりめぐらして正体をかくそうとしている印象を受ける」と「断罪」している
[当間、1971]、「ひろい意味での文化問題として、日本復帰すべきか否かは、それほど問題ではない」から始まる大城の当のエッセイは、復帰/独立ということに争点を限定して読むならば、確かに当間の指摘する通りのものである。

...「本土復帰」という言葉が、いつごろはやりだしたか、しらべてみる必要がある。「祖国復帰」「日本復帰」は沖縄がわが言いだしたものであろうが、「本土復帰」はたぶん本土がわが言いだしたことだ。...そして、沖縄を同情の眼でみる風潮がではじめた。同情を拒否する姿勢は沖縄がわにあったけれど、「本土復帰」という言葉は、そのなまあたたかさを容易にうけいれ、そのなかにひそむ秘密の毒に気づかずにきた。この言葉のなかには、沖縄をこれから本土ペースにまきこんでいくことの予言がある。そして、それを沖縄がつかいは

じめたとき、それを予諾する、というよりみずから進んでそのペースにのめりこんでいこうとする、怠惰な志向がある [大城、1970a:62]

というように、新川が指摘するこの時期の 復帰 思想を正しく言い当て、そののめりこみの精神を戒めている。その一方で大城は、

...「反復帰論」というテーマをあたえられたけれども、ここでいう復帰とは、私の場合、「東京」に象徴される日本の腐敗文化に盲目的に追従していくことを意味しており、その性根をすてようと提案していることにほかならない。真の「復帰」とは、文化想像力の回復だと考えたい。...「本土復帰」ではなく、生まれ変わるべき「日本」への復帰であるはずなのだ。見かたによればそれは、沖縄の本土への復帰ではなく、本土の日本復帰だということになるのかもしれない [前掲書:63]

という結論に帰着する。上の引用文に限らず、大城立裕のいわゆる沖縄文化論には、新川明が、沖縄においてあるべき「文学する者の主体性」と対峙させていた国家、より正確には 国民国家 という観念がすっぱりと抜け落ちている。この沖縄文化論の特徴が当間をして「煙幕をはりめぐらして正体をかくそうとしている」と言わしめたものであり、新川にアンヴィバレントな大城観を抱かせたものなのである。

新川明が大城立裕に対してなした『統合と反逆』における（反）批判に、新川自身が大城の琉大文学批判に感じていたような過剰さや執拗さをみるのは、そのような大城の沖縄文化論を強引に自身の「新同化主義」批判という俎上に引っぱり出し、無理に断罪しようとするからである。例えば、大城の論理の「限界性は、いわゆる国家論が、大城の視界に存在しないことに由来する」と正しく指摘しながらも、その後で、大城の言説の前提に「国家としての『日本』の絶対性が指定されている」と断ずるのは無理があるだろう。なぜならば、国家論（あるいは 国民国家 という観念）をその視界に有しない者が正しい意味での「国家の絶対性」を指定するはずもないからである。また、大城の自伝

的エッセイ集である『光源を求めて』の「光源」を国民国家 日本 のメタファであるとの解釈（207頁）や、大城のここ最近の文学的テーマである「土着から普遍へ」の「普遍」を「日本的に平準化され、文壇的に認知される文学を意味する」とした理解（208頁）にも同様な新川らしからぬ強引さが感じられる。

要するに、新川の「大城立裕論ノート」における本旨は争点 において「『琉大文学』は戦後沖縄文学史上において問うに足る存在である」ということを内外に確認することにあつて、沖縄文学 の正典となりうる大城立裕の「自伝的自己総括」の正統性に意義を差し挟むために争点 が持ち出され、大城のいう「文学者としての主体性」が「同化主義」に即して批判されたのではないだろうか。

（2）文学する者の主体性

話は前後するが、『光源を求めて』において示されている大城立裕の新川明（及び『琉大文学』）批判の焦点は、第一に『琉大文学』が本土の文学傾向である社会主義リアリズムを標榜する余り、理論的意識過剰、技術軽視、政治的テーマ主義に傾き、「花鳥風月や抒情を蔑み、ユーモアを解さず、風土性に眼もくれず、エロスの入り込む余地を排した」こと、第二に新川らの「沖縄は日本ではない」として復帰幻想をうち砕くことに専念する反復帰論が本土で書かれた思想（吉本隆明の「異族の論理」）を真似たような思想であることという二点に集約でき、いずれも新川らの「主体性」のなさを問題にするものである〔大城、1997:161、208〕前者については、加藤宏が示唆するように、P・ブルデュエーのいう文学場においてまったく異なるハビトゥスをもつ大城立裕と『琉大文学』のメンバーたち（新川明）という点から解釈が可能であるし〔加藤、2004〕後者については、上で述べたように、大城自身に 国民国家 という観念がないことから 反復帰論 の意義を正しく理解していない（できない）という点が指摘できるが、この新川への批判から、大城立裕のいう文学者の主体性を想像することは難くない。大城のいう文学者の主体性とは、新川も指摘しているように「思想の独創性」ということであろう。しかし、大城にとって、

この独創性は常に本土（ヤマト）との関係の中で相対的に生じてくるものだと
思われる。新川らの文学や思想が主体的でないで大城が断ずる論拠は、それが
本土の真似、「ヤマト流れ」だからという点にあるのだ。

しかし、大城のいう文学者の主体性は、主体的（独創的）であるかどうかの
準拠点として本土（ヤマト）を想定するにとどまらない。以下の引用にうかが
えるように、その主体性は、再び本土（ヤマト）との関係のなかで真価を發揮
されるべきものなのである。

私ども自身で心掛けなければならないことは、まず意識と表現とを主体的に
することにあります。私は文学をやる者としてことにそれを痛感します。自分
の表現をもたなければ、日本文学に参加のしようがありませんから、実感に忠
実に、風土に根ざした表現をすること [大城、1972=1977:75]

...草の根の庶民の子弟たちが、ヤマトへ就職に渡って挫折しつつある現実を
目下の歴史的問題として考えたい。課題は日本のなかにあって沖縄の主体的誇
りをいかにもつか、ということである。...生活のなかで深くヤマトの影響を受
けながら、ヤマト的なものにアレルギーを感じて挫折する、ということほど悲
劇的な矛盾はない。...この矛盾を断ちきることが、つまり歴史的宿題の解決と
いうことになるが、それには「沖縄の個性を生かし、日本の文化創造に寄与す
る」ことに努力するほかはない、と考える。...あたらしい文化財をつくる努力
が必要である。ヤマトでは生みだしえない文化的創造をなすことで。沖縄なし
には日本文化を考えられないようにすることである [大城、1973=1977:91-2]

大城はあるエッセイで「戦後史に主体的にかかわるとはいかなることか。私
にとってそれは、一旦突入した歴史をもとにもどせないものとすれば、そのマ
イナス面をできるだけ節約し、その環境からできるだけプラスの面を吸いあげ
るよう努力すべきだという考えを基礎にしていた」と述べている [大城、
1970b=1977:12-3]。大城立裕が沖縄の日本復帰前後に綴ったエッセイをまとめ
た『沖縄、晴れた日に』には、徹底したリアリストである彼が沖縄の政治的な

日本従属（本土復帰）を与件のものとみなしていたことがうかがえる。大城にとって重要だったのは、むしろその後のことであり、日本との政治的な再統合の後、沖縄がいかにして日本文化の中で文化的なアイデンティティを保てるかということに注意が向けられている。結論からいえば、大城はそのために「沖縄の個性を生かし、日本の文化創造に寄与する」途を提案しているのであるが、この並列する二つの節のどちらを強調するかで文全体の意味が全く異なったものになるのである。新川明は「日本文化に貢献する」という後節を強調して大城批判をするのだが、以下の引用を参照すれば、大城がむしろ前節を重視しているのがわかるだろう。

これから先、沖縄の文化がどうなるか、どうしていかなければならないか、ということですが、沖縄の文化的個性をもって日本文化を太らせていく、ということを考えるべきだと思います。文化が誇るにたるものであるかないかということは、他国、他地域の文化に影響を及ぼし得るかどうかとも一要素になるとと思いますが、沖縄は残念なことに他国から影響ばかり受けて逆に及ぼしたことがなかった。これからそれを逆転させたいものです [大城、1972=1977:74]

沖縄方言はいずれ滅びるものである。その傾きを、いかなる運動もくいとめることはできない。そのよさを残すためには、日本語に移植するしかない。詩人、作家の使命がそこにある [大城、1976=1977:189]

沖縄の個性を生かすことで日本文化の創造に寄与するのではなく、日本文化の創造に寄与することを通じて沖縄の個性を生かす、それを実践してゆくことが、運命的な歴史からマイナス面を節約し、プラス面をできるだけ吸いあげるよう努力すべきだと考える大城立裕にとっての「文学する者の主体性」であった。

その一方で、新川明はこの「文学する者の主体性」をどのように考えているのだろうか。それは『琉大文学』における諸評論の中に既に兆しており、反復帰論においてよりはっきりとした形を結ぶ。新川は1954年、鹿野政直をして

「沖縄の戦後文学史に残る」と言わしめた評論を続けざまに発表する。『琉大文学』第6号に掲載された「船越義彰試論 その私小説的態度と性格について」と同7号の「戦後沖縄文学批判ノート 新世代の希むもの」である。前者は当時の沖縄の詩壇で代表的な位置にあった船越義彰に対する、後者は「新聞社の懸賞で出てきて、出ると間もなく雑誌がつぶれて、…新聞小説に走って、いわゆる作家として祭りあげられた」既成作家たち（太田良博、大城立裕、城間宗敏等）の作品に対する批評である。これらの「先輩」詩人、作家たちへの批判の要は、新川自身の発言を大雑把にまとめてみると、沖縄の戦後文学は「空白」であり、その「空白」の原因は、「沖縄文壇」において文学的伝統・遺産、あるいは国家権力へのアンチテーゼとして自分たちの文学を出さなかったこと、すなわち、文学する者の主体性が確立されていなかったことに帰せられるという点にある〔太田・大城・新川・池田、1956:6-7〕この発言が示唆する「文学する者の主体性」は、1970年前後の反復帰論においては「みずからの内なる痛みとしての国家幻想をいささかなりとも存立せしめない内に向けた不断のたたかい」を实践するという沖縄人のあるべき姿としての相貌をみせることになる。さらに、新川がこの「文学する者の主体性」という評価点から大城立裕を裁く際に、それはより明確な輪郭を与えられるのである。

『統合と反逆』所収の「大城立裕論ノート」において直截的に「現前の過酷な政治的、社会的状況のもとにあって、この状況とどのように切り結び、自らの文学を創り出していくか、ということこそが文学する者の『主体性』の問題である」と断言した上で、新川は大城の「文学する者の主体性」に懐疑を投げかける。大城立裕の「文学する者の主体性」が疑わしいことを示す決定的な例として、新川は、大城立裕論の白眉とされる鹿野政直「異化・同化・自立 大城立裕の文学と思想」を引きつつ、作家・大城立裕の海洋博への関与（文学する者の社会参加）と、大城の海洋博を舞台にした小説作品『華々しき宴のあとに』（文学的成果）との連関を持ち出してくる。

海洋博（沖縄国際海洋博覧会）は「海 その望ましい未来」をテーマに沖縄本島北部の本部町で36の国と3国際機関が参加して1975年に開催された。海洋博は当初沖縄経済に対する起爆剤として期待が寄せられていたが、開催が近

づくにつれ、環境破壊や物価高の問題がクローズアップされ、開催後も地元中小企業の倒産が相次ぎ、物価高と失業という「海洋博後遺症」をもたらしたとして総括されている。大城立裕は「『復帰』を現実として受けとめる以上、閣議決定のさきに行くほどの積極主体的な姿勢をもとう」との理由（そしてもう一方では「県の公務員で文化問題の専門家」という立場）から、海洋博という事業の企画・運営に関与していくことになる。当時は岡本恵徳、中里友豪、いれい・たかしといった、かつての『琉大文学』のメンバーたちからこの大城の海洋博への「加担」を批判する声が上がっているが、鹿野が指摘し、新川がそれを受けつ持ち出すのは、大城の海洋博への「関与」と海洋博から4年後の1979年に公刊された小説『華々しき宴のあとに』との主体性をめぐる連関である。実際に海洋博の会場となった本部半島の対岸に位置する伊江島を架空の舞台にし、海洋博が「村落共同体の網の目をみるみる切断してゆくさまを如実に写し」、島民が海洋博に呑みこまれる中で繰り広げられる悲劇的な騒動を「喜劇風に仕立てた作品」が『華々しき宴のあとに』である。鹿野はこの作品の文学的な評価を最小限にとどめ、以下のように結論する。

この作品は、海洋博を先頭とするヤマト世の到来が、作者にとって、予想をこえる痛烈さ、苛酷さをもっていたことを、おのずからにして確認し告白している。その意味で『華々しき宴のあとに』は、大城の、苦い想いをこめた海洋博総括である。しかし、その総括には、沖縄文化の自立と貢献との理念を掲げてのことであれ、海洋博に「加担」した自己の責任意識の苦渋はみえにくい。そのことを、わたくしはいぶかしく思う。…総括の作品として、島の伝説を主題とする蠅人形館をつくり失敗する若者をではなく、沖縄において事業を推しすすめた人々を主人公とし、その初心と板挟みと錯誤を“人間喜劇”として描きだしていれば、大城は、錯誤を乗り越える途を、主体をかけていっそう明確に提示しうることになっただろう（傍点引用者）[鹿野、1987:466-7]

鹿野はここで大城の「責任意識」を問題としている。海洋博に加担した大城立裕の自己責任がその文学的成果である『華々しき宴のあとに』では閑却され

ているのだと。新川はこの鹿野の指摘を受けて、海洋博を演出する側にあった者が「小説家であるというそれだけの“特権”をもって自らも加わって演出した『宴』に踊らされた人びとを喜劇仕立てで小説化する無神経な傲慢を認めることができない」と大城に批判を浴びせている〔新川、2000:192〕。大城立裕にとって、「文学する者の主体性」とは文学的成果（作品）における独創性のことであり、その準拠点となるのは日本（ヤマト、本土）であった。それに対して、新川明にとってのそれは「文学者の社会参加」と「文学的成果」の連関において生じてくる自己の責任意識のことである。両者の主体性に対する認識にはそのような決定的な相違がある。その認識の相違が、新川 大城論争において相互の論点を決してかみ合うことのないものになっているのである。

3. コンヴェンションの「不在」とその代替としての自己準拠

(1) コンヴェンションの「不在」という問題

『統合と反逆』の中に反復帰論との連続性を想定した場合に、異質なものとして浮上するもう一つの記述、それはこれまで自身について寡黙であった新川明が自分史として提示する第2章「自分史の中の『反復帰論』」である。先にふれた、「同化主義」の思想を、反あるいは非「同化主義」の思想をもって撃滅するという『統合と反逆』の主旨からして、この「自伝」はそれを読む者にある種の違和感を抱かせるのである。

「自分史の中の『反復帰論』」は96年から97年にかけて沖縄で盛り上がった独立論（「沖縄独立論」⁽²⁾）を暖かい眼差しで傍観する新川の現在の存立拠点を、自身が反復帰論を展開するに至った道程（「祖国」への失望 島尾敏雄との出会い 八重山での体験 「国政参加拒否」闘争）、日本復帰後における自身の足跡（「松永冤罪事件」救援運動、「CTS反対」闘争、『新沖縄文学』『沖縄大百科事典』との関わり）の延長線上に位置づけて明示するものであるといえる。それは政治的な言説であるとみなされたが故に、政治的具体性がない、具体的政治活動を伴わないと批判された反復帰論として「新川明」への評価に対する彼なりの回答であり、反復帰論 が「個を位相」とする営為であることを内外に確認するための「自分史」である。新川自身によってそのように相

対化された 反復帰論 が何であり、また、なぜ今になって彼が「沖縄独立論」にコミットするのかを下の一文が饒舌に示している。

再び「反復帰」に話を戻す。それが政治運動でないことは…述べたが、それを表現する方法と表現された実体は各人各様である。基本的には国家との関係をどのようなスタンスで考え、自らのアイデンティティの根拠をどのような形で問い続けるのか、その「志」の持続によって示されると私は考えている。70年前後の激動する状況の中で吐き出された激越な言説にこめられた直截的な思想表現で完結するものではなく、一見平凡な営みの中にも生き続け、表現されているものなのだ [新川、2000:128]

「個を位相」とする営為は「平凡に見える」というより、より正確には、それが「全体」という場で生成されるコードを媒介しないが故に、極めて「みえにくい」ものであるというべきだろう。反復帰論 はその本質として「個を位相」とするものであることを上にみてきたが、それ故に暗数として伏せられている部分（新川明の言説ではなく、新川明の営み）があまりにも多かった。反復帰論 の全貌を明るみに出すためには、新川明の「個」としての営みが明示されなければならない。新川明は、「個」として、その一つひとつが「権力のない状態」へとつながるであろう自身の営みについて語らねばならなかったのだ。それが「自分史の中の『反復帰』論」である。

以上、反復帰論と『統合と反逆』との非連続性を、なぜ大城立裕に対しての執拗なまでの批判が繰り返されているのか、なぜ新川明が「自伝」として自身について語らねばならなかったのかという2点から考察してきた。この非連続を 沖縄文学 という全体的な文脈において捉え返したとき、どのようなことがいえるのだろうか。

まず第1の点について総括しておく。大城立裕と新川明の間には、「文学する者の主体性」をめぐる解釈に大きな隔たりがあり、双方が自身の主張する「主体性」を武器にして相手に攻撃をしかけるのであるが、この議論がどうに

もかみ合わない。大城立裕は反復帰論を含めた新川の「文学する者の主体性」の意義をまったく理解していない（理解しているにしても大城の諸言説の中にそれはみえない）し、新川明の大城批判は、その大部分が正当な批判であるにしても、とりわけ大城を「（新）同化主義」と結びつけ、その「文学する者の主体性」、引いては戦後 沖縄文学 における大城の権威を否定してみせるあたりには、上に列記したように、激しくも冷静に持論を展開する新川らしからぬ強引さが見受けられる。この主体性をめぐる両者の見解の相違と、そして、新川の性急な大城批判の中にほのみえる 沖縄文学 における正統をめぐる争いをどのように解釈すべきなのか。加藤宏は「沖縄文学 場の研究」において、P.ブルデューを援用しつつ、戦後における沖縄の文学シーンを、集合的な信憑により支えられている「様々な立場をとる作家たちと出版者・編集者、読者、ファン、及びそれらを支える学校、出版社、新聞社等の組織や制度、新聞・雑誌等のメディアからなる限定的で実体的な社会空間」である「文学場」として捉え、『琉大文学』を起点として変遷するメディアの中で展開されてきた大城立裕（そして池田和）と新川明（そして川満信一）の一連の論争を、異なるハビトゥス（社会的に植えつけられた性向や身体的な文化資本）をもつ両者の「文学的正統性の承認をかけた競合・闘争の軌跡」として描き出す可能性を示唆している [加藤、2004]

しかし、沖縄文学 という全体を想定してみた場合に、反復帰論と『統合と反逆』との非連続性を示す第2の点、「なぜ、新川明は自身について語らなければならなかったのか？」というのはどのように説明できるのだろうか。

実は新川明が一貫してその「闘争」の相手としてきた大城立裕も、自分自身について語らねばならなかったということでは新川と同じ問題を共有していたといえる。大城立裕は、これまでその小説作品の数に勝るとも劣らない沖縄ないしは沖縄文化に関する評論（エッセイ）を執筆し続けてきている。その評論の重要なもののいくつかには、新川明が指摘するように、「沖縄を語り、沖縄文化を語る時に、あらゆる場面、事象の説明資料として自作品が頻繁に引例される」という大きな特徴がみられる。新川はこれを「戦後沖縄の文学を切り開き、作品によって体現してきたのは己ひとりだ、という自負」とみるが [新川、

2000:184]、果たしてそうだろうか。このことを逆にみるなら、自作品を意味づけるものとして、あるいは自作品の説明資料として、沖縄ないし沖縄文化があり、「自伝」が引用されたという解釈ができないだろうか。ちょうど新川明が「見えにくい」、「個を位相」とする営為を明示するために自身について語らねばならなかったのと同様な環境による制約が大城立裕にもあったと考えられないだろうか。ここでわれわれはまた一つの疑問に行き着く。なぜ、沖縄で「文学する者」は自己自身について語らねばならないのかという疑問である。その解答としてコンヴェンションの「不在」という視点を最初に提示しておく。

H. S. ベッカーはモダン・アートを解釈する枠組みとして「アート・ワールド (art worlds)」という概念を提示する。ベッカーによれば、「アート・ワールド」とは「芸術 (アート)」として定義されるモノやイベントを「生産」するすべての人々、作品のアイデアを構築する中核的な芸術家はもちろんのこと、作品の原材料となる諸資源を製造する人々、作品を表現するための言語を創造する人々、中核的な芸術家と協同して作品を完成する手助けをする人々 (俳優や技術スタッフ、編集者などの「サポート・パーソネル」)、芸術の批評家、芸術の愛好者、鑑賞者等からなる、芸術がそれとして世に出るためのすべての人々の協同的なネットワークを指す [Becker, 1974:775]。そのようなネットワーク、様々な人々からなる芸術を生み出すための「労働の分業」がいかにして可能になるのか。芸術が一人の芸術家ではなく、複数の様々な利害をもつ人間たちの協同的な活動の結果として生み出されるとするならば、それらの諸活動はどこかで調整されコンセンサスをみななければならない。やがて一度コンセンサスを経た協同活動の仕方は、協定的な慣習として、すなわちベッカーのいう「コンヴェンション (conventions)」として芸術の諸実践が準拠するところとなる [Becker, 1982:Chap. 2]。すなわち、芸術に関わる設備・資源・施設のあり方、芸術家ないしは「サポート・パーソネル」の訓練方法、美学者や批評家が芸術を評価する方法等、芸術を「生産」するのに必要なあらゆる協定的な慣習の体系がコンヴェンションであるといえ、「アート・ワールド」として描かれる協同調整的な諸活動は「コンヴェンション」の存在によって可能になるのである。

岡本恵徳は、「琉球処分」から敗戦に至るまでに沖縄において展開された諸々の文学活動と戦後のそれには質的に大きな隔りがあることを指摘する。明治から昭和初期にかけての沖縄の文学活動は、近代化の流れの中で沖縄独自のものを自己否定し、中央の文壇文学をモデルとしそれに近似することで表現を行ってきた。しかし、敗戦による本土との行政分離によって、戦後沖縄における文学活動は、中央の文壇文学から制度的な断絶を余儀なくされ、この物理的な「断絶」は、必然的に沖縄において文学活動を実践する者の眼差しを「自らの生きている地域の独自な性格」に向けさせることになったという〔岡本、1981:91-2〕

米国の占領開始から数年を経て、「うるま新報」「沖縄タイムス」「沖縄ヘラルド」といった新聞及び「月間タイムス」「うるま春秋」といった雑誌が刊行されるようになる。これらの媒体に山城正忠、山里永吉など戦前からの書き手が作品を発表するようになるが、その一方で、新しい執筆者を求めての「懸賞募集」を通じて発掘された大城立裕や嘉陽安男といった新しい沖縄の書き手たちが新聞小説の中で育ってきた。しかし、岡本恵徳のこの時期における文学活動に対する評価は手厳しい。1945年から1951年頃までの沖縄における文学活動について、戦前から活躍していた人たちは古い文学観や方法で文学活動を続けており、大城らの新人たちはそれについて自覚的とはいえず方法において素朴な実感的な態度に終始していると岡本は評している〔岡本、前掲書〕

大城立裕はこの時期の、自身の文学活動の出発点について正直に言及している。

私自身についていいますと、私の処女作が「明雲」ですが、あれのテーマが、戦争中とにもかくにも拠りどころをもっていた私の生が、戦後その拠りどころを失い、さてこれからどう生きるのかという模索の経験を作品にしたのです。つまり、われわれの世代は、物心ついて以来、暗い谷間ばかりをさまよい、自分のさいなまれてきたのを客観的にみることができなかつたし、結局どこをめざしてゆけばいいか、全然わからなかつたわけでした。それを模索するということが、私にとっては文学であつたし、今もって正確に言えば、さぐりあてて

いないのです。…結局、各人各様の生き方を求めてそのまま文学にしてある以上、そこに才能に対する自覚や思想に対する自覚もないわけで、新しい自覚的な積極的な運動といいますが、そういった活動はできなかつたろうと思うのです [太田・大城・新川・池田、1956:3]

先にもふれたように、機関誌『琉大文学』によつた新川明、川満信一ら琉球大学文芸倶楽部のメンバーは、太田良博や大城立裕など戦後間もない頃に新聞を主要な発表舞台として登場した既成の作家たちを批判することで沖縄における批評を確立した。その後、『琉大文学』の新川、川満は「既成の作家たちとも連携して幅の広い文学活動をしたい」という動機から、大城、太田らと「沖縄文学の会」を結成し（1956年）、会の機関誌として『沖縄文学』を発刊する。上の大城の発言は、その創刊号「出発に際して 戦後沖縄文学の諸問題」と銘打たれた座談会で、戦争を体験したはずの太田、大城がそれを切実な問題として受け止めることなく、そのために沖縄の戦後文学の出発というものはきわめて「自然発生的」なものでなかつたかという新川の問に対する回答として出されたものである。大城がここで述べていることは、「自己確認」のため、青春期には「祖国」と一体となることを幻想していた自分が「祖国」を失ってしまった痛手、孤独をどう切り抜けるか、その思いを文章に表現したい欲望から、処女作「明雲（戯曲）」を綴つたという告白である。つまり、一個人のアイデンティティをめぐる思想的な営為に大城立裕の文学者としての出発点はあつたのである。大城らのこの時期の文学活動が自然発生的なものであり、趣味的なもの以上になつたという岡本の指摘、自己の戦争体験に対する凝視や苦悶が作品上に現れていないという新川の批判の根拠もここにある。当時の大城はこの批判を真摯に受け止め、「沖縄の文学の自覚的な歩みが今始められたものとすれば、『琉大文学』の功績を是非云わねばならぬだろう」と発言している。『琉大文学』の批判によって既成作家たちも自己の文学的立場や方法を明確にせざるをえない契機を与えられ、『琉大文学』のメンバーと「連携して」「沖縄文学の会」を結成したこと、このことは、作家、批評家、読者というユニットの地位・役割関係が極めて未分化ながらも（そして往々にして本質的な

読者 を欠きながらも、他のものとの間に画然とした境界線を有する文学ジャンル（沖縄文学）を創造するための協同的なネットワーク（ベッカーのいうアート・ワールド）が成立したことを意味する。しかし、「中央の文壇文学に近似することで表現を行う」という過去の暗黙の協定を拒否したこの新しいネットワークは、自らの手で、自らの文学が「中央の文壇文学」から自律的であるための諸協定（すなわちコンヴェンション）を創りあげていかなければならなかった。殊に 沖縄文学 の内容、すなわち、どのような規準をもってそれを 沖縄文学 とみなすかという新しい準拠点の構築はまさにゼロからのスタートであったといえよう。1950年代において、この新しいネットワークが、「文学する者の主体性」に議論を終始させていることからそのことがうかがえる。しかし結局のところ、この新しいネットワークは 沖縄文学 の認知あるいは評価に関する優勢なコンヴェンションをえることができないまま1960年代を迎える。岡本恵徳によれば、1960年代とは、「（本土の文壇の動向の影響とあいまって）文学的立場や方法が多様化し、…同人誌が輩出するとともにその離合集散が激しく」なった時代である〔岡本、前掲書：123〕。この岡本の見解は1960年代を通じて、沖縄文学 という独自の文学ジャンルを生み出すためのネットワークが構造化されることなく、また、ネットワークに加わる個々の行為者相互の間にコンセンサスをみることもなく、すなわち 沖縄文学 のコンヴェンションが「不在」のまま、個々の活動を継続していたことを示している。沖縄タイムス社が1966年に沖縄タイムス芸術選賞文学部門の発表機関として『新沖縄文学』を刊行したのは、一つにはそのように「離合集散」する個々の文学活動を組織化していくというねらいがあったという。『新沖縄文学』は、長堂英吉、星雅彦といった新しい書き手の登場を促し、これまで文学活動を行ってきた大城立裕・嘉陽安男らの作品発表の舞台となる。そして、『新沖縄文学』第4号に掲載された大城立裕の「カクテル・パーティー」が1967年上半期の芥川賞を沖縄で初めて受賞することになる。大城の芥川賞受賞は 沖縄文学 にとって、そして大城自身にとってどのような意味をもっていたのだろうか。

(2) 代替としての自己準拠へ

「純文学」の新人に与えられる芥川賞は、説明するまでもなく「本土の文壇文学」において最も権威ある文学賞である。この芥川賞の受賞によって、大城立裕は「本土の文壇文学」を形成するネットワーク（それを仮に 日本文学 とよぶ）に組み入れられたことになる。しかし、大城は同時に 沖縄文学 のネットワークを構成する重要な成員であり、芥川受賞後もそのネットワークにとどまり続けたことから（「東京へ出て行って、僕は何を書くんですか」…私は東京へ出ていくことが怖かった）、望むと望まざるとによらず、日本文学 と 沖縄文学 の結節点として機能するよう宿命づけられる。恐らくこのことが、芥川賞受賞によってえられる栄誉と同じくらいの苦悩を作家・大城立裕に課したと思われる。一方で 日本文学 のコンヴェンションを意識し、もう一方で 沖縄文学 のコンヴェンションが「不在」とであるという当時の状況下で創作活動を継続していかなければならないポジションに大城はいたのである。

芥川賞受賞がもたらす 日本文学 のコンヴェンションの意図的な意識によって、大城立裕は大きな挫折を味わうことになる。第一に、「カクテル・パーティー」という作品が基地沖縄という政治的な状況を「後追い」する形でしか「本土側の文士たち」に理解されない、すなわち政治というフィルターを通してしか 沖縄 を視界に入れられないということが明白になったこと。芥川賞の銓衡委員の選評をみれば、委員たちの脳裏に受賞のこの時事性との関連が強く意識されていたであろうことを想像するのはさほど難しいことではない⁽³⁾ [鹿野、1987:263-5]。第二に、沖縄の死生観及びその他の神話的な空間が描かれており、大城が「カクテル・パーティー」よりも普遍的価値が高いとみなす自作品「亀甲墓」が「分かりません」という理由で本土ではまったく評価されなかったこと。大城はこのことを「試練」という言葉で表現し、「私の作品にたいする中央での評価が低くばあい、ほんとうに技倆の不足によるものであるのか、『亀甲墓』のように、むこうがオキナワを知らないことによるものであるのか、判然としない」という不満を告白している [大城、1972]。芥川受賞から沖縄の本土復帰前後に執筆された大城の評論、エッセイを収めてある『沖縄、晴れた日に』（1977年）には、大城の本土（文壇に限らずジャーナリ

ズム、日本人一般を含む)への不信、そこからくる不安が延々と綴られてある。

本土から取材にきた記者が、「沖縄のひとは戦争体験をもっているから、反戦の気持ちがつよいそうですね」というから、私は客観的にはかならずしもそうとは限らない、ということを説明した...が、こうなると彼の新聞の編集上はなほだ困るので、記事になったとき、わたしの意見は無視された(1970年「戦後二十五年の思想 得たものと失ったもの」)

『現代の眼』という雑誌で現地座談会をやり、それに出席した。そのなかで、なぜはやく復帰しなければならないかということにふれて私は、「憲法体制下に」ということを言っている。雑誌になったのをみたとき、はてなと思った。...そこに「沖縄の人たちが望んでいるのは、“平和憲法”下への復帰だ」とある。私のいった「憲法」はじつは“平和”という形容詞をつけて考えてはいなかった。...私はそのとき、革新の側における本土的発想のおしつけを感じ、いい気持ちがしなかった(1970年「憲法を突きぬけるもの」)

古波倉保蔵という同郷の先輩は、私の『ニライカナイの街』という作品がとても好きだとおっしゃる。あれくらいコザの街をというものを生き生きと描いた文章はない、という。文芸時評にはどう出たか、と興味をおもちだが、じつは文芸時評に出なかったと答えると、「批評家が知らないからな、コザの街を」というコメントであった。知らないものには、たしかに関心を向けがたい。...日本人一般が“沖縄”を被害者状況としてのみとらえるあまり、小説をその面から高く買いすぎるか、さもなければ感傷的だといってけなし、そしてそれだけに終始して、その他の門からのアプローチを全然無視する傾向がある(1975年「通俗状況論のなかで」)

大城立裕がここで訴えていることは、本土側が沖縄を知らないゆえに、辛うじて知っていること(政治的問題)に解釈の枠組みを限定して沖縄を理解しようとしていること、さらにその一義的な解釈を沖縄側に押しつけようとするこ

とに対する異議である。大城が当時置かれていた本土との関係は、新川明のそれと酷似している。新川が反復帰論を展開することは、それを「文学する者の主体性」と結びつけて考えるならば、『新南島風土記』の執筆や『新沖縄文学』の編集と同等に、「状況とどのように切り結び、自らの文学を創り出していくか」という彼の文学的な営為の一環であると理解できる。ところが反復帰論はそのようなものとして理解されなかった。新川の反復帰論の場合も、本土側が政治的に限定した争点の中で解釈され、批判されたのである。大城の文学作品、新川の諸言説ともに、多くの場合は沖縄内部においてさえも、本土によってあらかじめ準備された政治的、あるいは「状況的」コンテクストを通じてしか可視的にはならなかった。このことは 沖縄文学 に対する 日本文学 の相対的優位と、そして 日本文学 に対して、 沖縄文学 という全体的な枠組を生成させるコンヴェンションが「不在」であることをあらわしているように思える⁽⁴⁾。

そのような状況下において、日本文学 と 沖縄文学 の界面として機能し続けなければならなかった大城立裕はどのような途を選択したのか。まず外（日本文学）に向けて、大城は 沖縄文学 のコンヴェンションの代替としての自己言及を開始する。実際に大城の手による「沖縄文化論」の体裁をなすエッセイ（評論）の大部分が芥川賞受賞（1967年）から本土復帰（1972年）前後にかけて執筆されたものであるということは注目に値する。そこでは上にみたような本土への不信感とともに、その不信感の背景にある（日本とは異なる）沖縄の歴史・文化、大城がそれまで歩んできた自分自身の履歴、その中で個々の作品が生まれ出された経緯などが縋い交ぜになって示されている（例えば『同化と異化のはざままで』、『沖縄、晴れた日に』）。そこに見いだされるものは、新川明が『光源を求めて』について指摘するような「戦後沖縄の文学を切り開き、作品によって体現してきたのは己ひとりだ、という自負」ではなく、自身の作品をなんとかして「全体」のコードの中に位置づけようとする情熱と、そして、それでもやはり「本土」は自作を理解することがないだろうという諦念である。大城立裕が 日本文学 のネットワークに組み入れられたため、そしてまた、その一方で大城が連なる 沖縄文学 のネットワークが 日本文学

との関係において、沖縄文学のコードとして機能する独自のコンヴェンションを有しなかったため、大城の作品は本土側から、極めて個人的な作品であるか（感傷的だといってけなし...）本土側のコンヴェンションに即して極めて政治的な作品であるか（“沖縄”を被害者状況としてのみとらえるあまり、小説をその面から高く買すぎる）そのどちらかの観点からしか評価されなかった（と大城は解釈する）のである。そこで大城立裕は自身と全体であるべき沖縄とについて語らなければならなかった。準拠すべきコンヴェンションの代替としての自己準拠である。

4．結び

大城はあるエッセイで自分を「語る」ことの意義について以下のように述べている。

...自分一個の立場と沖縄全体の立場とのどちらを考えるか、...二つを分けて考えることは意味がないだろう。沖縄全体のことは知らないから自分のことを語る。といっても、自分のことがある程度同心円的に沖縄全体のことにはひろがる可能性をもつばあいにはのみ、書くことは有効だろう。これまで書いた人たちもしかし、私小説風書きながら、その広がりを感じさせた。これはやはり、沖縄戦後史のなかでの個々の沖縄人の意味の重さを物語るものだろう。私の場合もそれで、あの戦争（というより軍事主義的、天皇制的、旧大日本帝国体制）の挫折が、ほとんどそのまま私個人の挫折であり、沖縄の挫折でもあったようだ。私からみると、個人 沖縄 日本と、三つの同心円の問題であった [大城、1977:9-10]

大城立裕は戦後において「自己確認」を目的とする極めて個人的な動機から文学活動を出発させた。そんな大城にとって、自分自身を語ることは「同心円的に」沖縄を（そして時には日本までを）語ることであったという。新川明は「反復帰論」をめぐる論争において、無自覚的に「個」を志向しつつも「全体」に包摂されていた。この時期までの大城立裕にも同じことがいえる。大城立裕

も「個（自分）」を描こうとして「全体（沖縄）」を描かざるをえなかったのである。こうして 沖縄文学 における主体は絶えず「個」と「全体」の間を揺れ動いてゆくのである。

しかし、大城立裕は概ね70年代の半ばを境目に自身について語るのを、その自己準拠を手控えるようになる。大城の「自伝的」なエッセイ（評論）がこの頃から際立って少なくなるのである。沖縄の本土復帰が実現し、海洋博も閉幕したことで、芥川賞作家として本土から発言を求められる機会が減ったということもあるが、大城の目は次第に外（日本文学）から内（沖縄文学）へと向けられていく。1973年に「琉球新報短編小説賞」、また75年には沖縄タイムス社による「新沖縄文学賞」といった沖縄在住者、沖縄出身者を対象とする小説の新人賞が創設され、大城立裕はその選考委員に就任する。そして受賞作の選考を通じて、より構造化されたネットワークと、そして主として「方言」と「素材」の扱い方に関する、沖縄文学（より正確にいうなら沖縄小説）を認知するための厳格なコンヴェンションを築き上げようとするのである[武山、2003]

【註】

本稿は明治学院大学社会学部の松島浄教授、東洋英和女学院大学国際社会学部の与那覇恵子教授を中心とし、加藤宏（明治学院大学）、鈴木智之（法政大学）、塩月亮子（日本橋学館大学）、水野宏美（慶應義塾大学）そして筆者で構成される「沖縄文学研究会」の共同研究の一部である。もちろん、文責を一身に背負うのは筆者であるが、同研究会における議論の中で本稿の論旨が形をなし、また固まっていた。本稿の最終的な完成にあっても同研究会のメンバーに多くの有益な指摘を受けた。改めてここに謝意を表したい。

（1 詩人としての新川明を『琉大文学』という起点において論じ、その批評の成果とともに新川明の「文学的営為」の名において反復帰論以降と結びつける作業を本稿では怠

っている。このことは、本稿で「沖縄文学におけるコンヴェンションの『不在』」とよぶものに対して新川明がどのように位置づけられるのかという視点を欠くことになり、前述した「沖縄文学研究会」の中でもそのような批判を受けた。この点については、『琉大文学』の意義も含めて、場を改めて考察したいと思う。

- (2) 96年から97年にかけて沖縄において大いに盛り上がった「沖縄独立論」とは、1997年5月14・15日に開催された「沖縄独立をめぐる激論会」に集約される。この会の中心人物である喜納昌吉は「独立」について以下のような見解を示しており、このような理念が「沖縄独立論」の中核にあると思われる。

独立とは一人で立つ意味である。国家で立つという意味ではない。中途半端な国家独立はバルト三国のように大きい大国の重石をかつがされる結果となるだろう。...そこで私が述べたいのは、独立=国家ではないのである。ボーダレスを超え自然と対話し、あらゆる生命と共生できる世界に人類の英知と技術を向けることのできるシステムを持ち、力の軸よりも理解の軸に基づく理性が優位に立ち、破壊の速度にまさる創造の速度を打ち立てるところにある[「沖縄独立の可能性をめぐる激論会」実行委員会、1997:6]

しかし、新川は「沖縄独立論」に、さらに広い意義を認めている。

重要なことは、...多種多様な「独立論者や独立論の称揚者たち」がこの地、沖縄に湧き出てきて、百花斉放、百家争鳴の趣を呈していること、これである。...多種多様な行動スタイルと思考パターンを包み込んだゆるやかな連帯意識でつながりながら、二十年、三十年単位で半歩か一歩すすむ程度の歩みを確実に刻めればよい... [新川、1997:217]

新川の「反復帰論」の新たな展開とその限界については、新崎盛暉との「居酒屋独立論」をめぐる論争及び「沖縄イニシアティブ」論争と関連づけて別稿で論じたいと思う。

(3)「芥川賞選評」の「カクテル・パーティー」評の主なものを以下に上げておく。

カクテル・パーティーは(私)で始まり途中から(お前)という第二人称にかわる。しかしその(お前)は前半の(私)である。その事の必然性がどうしても納得できなかった。私が私をお前と呼ばなくてはならぬ理由はなかったように思う。…次に暴行を受ける娘の、その暴行の事情がはっきりしないし、娘自身のそれに対する態度が書いていない。父が独りで怒っているが、娘の心理は不明で、作品としては片手落ちになっている。ただ沖縄らしい生活事情の理不尽さが書かれ、その理不尽が日常的であることもよく解るように思った。賞が遠い沖縄に飛んだことは面白い。文学は東京文壇中心などということはない(石川達三)。

「カクテル・パーティー」がいちばん読みごたえがあった。…最後がことに印象的であった。自分の家のはなれを外人と日本女の情婦に貸しているながらその外人に娘が犯されて騒ぎ立てるのは筋がとらないという批評も出たが、理屈ではそういうことになるが、個人の問題はまた別だ。この小説では大して傷になっていない。勝味のない告語をあえてやらずにはいられない主人公の気持ちが胸を打つ。そしてこの気持ちが沖縄のひとびとをはじめ、われわれの胸に通うものである(丹羽文雄)。

「カクテル・パーティー」は、ぼくらの関心をひかずにいられない題材を、たんになまの事実としてではなく、主人公の意識の問題として展開している点たしかに新しさがありますが、本来非常にむずかしい手法であるせいか、主人公の意識と現実とのあいだのドラマが、作品の中心であるべき筈なのに、極めて不十分にしか見られず、主人公の反省や省察が読者として素直についていけない底の浅さを感じさせます(中村光夫)。

…困難な沖縄の状況の下で、これだけの作品が出たということは、慶賀すべきことである。内地にはない深刻な状況が取り扱われていて、切迫した小説的興味を生み出している。子どもの失踪、強姦という二つの事件をつなぎ合わせて、沖縄の日常生活の底に潜む緊張を浮かび上げさせた作者の腕前は、非凡であると思った(大岡昇平)。

大城立裕氏の「カクテル・パーティー」は、この人の作ははじめてだが、描写に無駄がなく、テキパキ簡潔に、よく描けて居た。読了して、構成もよかった。目下米国占領下の流求人の、制圧された悲哀がよくわかった。沖繩のインテリの“私”が米人の家庭のカクテル・パーティーに招かれて、その晩帰宅すると、女学生の娘が米兵に強姦されて居た。インテリの父親は、その米兵を告訴しても、米国の占領治下の裁判では、泣き寝入りになるとわかって居ながら、敢えて米人の偽善と不条理とを究明するために、外聞も恥もかまわず明るみにさらして、自分を投げ出して挺身して、告訴する。しさいの場面、強姦の実地検証の場面は、当事者の米兵は出席せず、強姦された娘一人して、事を再演する所、残酷で悲愴な感じがした。…しかし、この小説は中国人の孫弁護士なども登場して、いろいろのことが二重写しになり、筋の段取りがあまりによく出来すぎで、あまりに達者なもので、作り物だという不安もした（瀧井考作）

- (4) コンヴェンションの「不在」、もちろん、戦後における 沖繩文学 の出発点においても文学的なコンヴェンションが全くなかったわけではなく、完全な無秩序、何一つ準拠すべき規準もない無の状態から戦後における沖繩の文学活動が始まったのではない。40年代から50年代にかけての戦後 沖繩文学 の黎明期においてさえ、沖繩文学 のネットワーク内部には、その中で「生産」される作品群を評価する際の論点も、例えば加藤宏が 沖繩文学 の50年代における論争の「輪郭」について触れているように、ある程度明確な形で存在しており、その他諸々の瑣末な作品の「生産」に関する協定を含めて、コンヴェンションが不在であったとはいえないだろう。また、大城、新川の両者が文学的な規準に準拠して自身の営みを正当化しえなかったために、その準拠点を社会的、あるいは政治的なコンテクストに求めたことを本稿で「自己準拠」と呼んだことももう少し分節化した議論が必要であったと思う（以上の点は、鈴木智之氏から指摘を受けた）。改めて述べれば、コンヴェンションの「不在」とは、芥川賞の受賞前後に大城立裕の作品が「本土の文壇文学」側からほとんど理解されなかったことに象徴されるように、日本文学 との関係において、沖繩文学 のコンヴェンションが自律した一つのコード、規準としてまったく効用をもたない状態の暗喩であるといえる。

【参考文献（引用文献）】

新川 明 [1970 a] 「新たななる処分への文化的視座」『沖繩と70年代』沖繩タイムス社 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1970 b] 「復帰 思想の葬送 謝花昇論ノート」『新沖繩文学』第18号 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1970 c] 「『非国民』の思想と論理」『沖繩の思想（叢書わが沖繩第5巻）』木耳社 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1970 d] 「憲法幻想の破碎」『現代の眼』1970年11月号 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1970年 e] 「内なる『辺境』から」『日本読書新聞』1970年1月号 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1971 a] 「復帰思想の虚妄」『現代の眼』1971年1月号 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1971年 b] 「幻像としての日本」『中央公論』1971年9月号 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1971年 c] 「反国家の兇区としての沖繩」 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明 [1971年 d] 「『差別告発』から『反逆』の持続へ」『朝日ジャーナル』1971年7月号 = [1971] 『反国家の兇区』社会評論社

新川 明、[1997] 「沖繩『独立論』のこと」「沖繩独立の可能性をめぐる激論会」実行委員会編『激論・沖繩「独立」の可能性』紫翠会出版208-228頁

新川 明 [2000] 『沖繩・統合と反逆』筑摩書房

Becker, Howard S. [1974] “ Art as Collective Action. ” American Sociological Review.39 :767-76

Becker, Howard S. [1982] Art Worlds. Berkeley:University of California Press.

鹿野政直 [1987] 『戦後沖繩における思想像』朝日新聞社

加藤 宏 [2004] 「沖繩文学場の研究1 『新沖繩文学』を手がかりとする制度論的アプローチ」明治学院大学社会学部付属研究所『研究所年報』第34号掲載予定

松島 淨・加藤 宏・鈴木智之・武山梅乗 [2000] 「沖縄文学 試論 沖縄近代文学の展開と現代」 明治学院大学社会学部附属研究所 『研究所年報』 第30号

「沖縄独立の可能性をめぐる激論会」 実行委員会編 [1997年] 『激論・沖縄「独立」の可能性』 紫翠会出版

小熊英二 [1998] 『日本人の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮、植民地支配から復帰運動まで』 新曜社

岡本恵徳 [1981] 『現代沖縄の文学と思想』 沖縄タイムス社

大城立裕 [1970 a] 「文化創造力の回復」 『新沖縄文学』 第18号、沖縄タイムス社61-3頁

大城立裕 [1970 b] 「戦後二十五年の感想 得たものと失ったもの」 = [1977] 『沖縄、晴れた日に』 家の光協会

大城立裕 [1972] 「文化問題としての今日」 = [1977] 『沖縄、晴れた日に』 家の光協会

大城立裕 [1972] 『同化と異化のはざままで』 潮出版社

大城立裕 [1973] 「文化史の新しい時代」 = [1977] 『沖縄、晴れた日に』 家の光協会

大城立裕 [1976] 「沖縄で日本語の小説を書くこと」 = [1977] 『沖縄、晴れた日に』 家の光協会

大城立裕 [1977] 『沖縄、晴れた日に』 家の光協会

大城立裕 [1997] 『光源を求めて（戦後50年と私）』 沖縄タイムス社

太田良博・大城立裕・新川明・池田和 [1956] 「出発に際して 戦後沖縄文学の諸問題」 『沖縄文学』 創刊号

武山梅乗 [2003] 「戦後における 沖縄文学の規準 自律と従属の狭間で」 明治学院大学社会学部附属研究所 『研究所年報』 第33号